

用水に対する感謝と幼児の水難防止を祈念したのである。

三 鍛 冶 屋

鍛冶屋の北部は佐賀市本庄町鹿の子と境をし、東部を実久に西部は上古賀に近接している。現在の戸数は二八戸で東与賀町内では小村落に属している。昔は鍛冶職がこの村落の大部を占めていたが、現在農業六、建設業五、卸小売四、運輸通信三、その他等で、ここも各種各様の業態で生計を保っている。

鍛冶屋という地名は、その昔この地区は鍛冶職の人が多かったので、そのまま「鍛冶屋」と命名されたものである。一番の最盛期の明治元年の頃は、この村落は四十戸余りもある大村落で住民のほとんどが鍛冶業を営んでいたらしい。その鍛冶といっても刀剣類や農器具ではなく、主として家の建築や船舶の製造に必要な和釘(当時は家釘とか舟釘とも言った)で、長さは八サツから十二、三サツの長い釘であった。その形も洋釘と違って、帽子のついた釘ではなくて、T字型の細長く、しかも長大な釘であった。

この釘造りには鍛冶屋さんは、ふいごを使って石炭がらやコークスの燃料で強力な火熱をおこし鉄の原料をこれて熱しては打ち、打っては熱して作ったのである。その鉄を打つカッチンカッチンの高い音律は昼夜を分かたずこの村内外に響き渡り、明治の終わり頃までこの家業にいそんでいたという。製品は主に佐賀市内や近くは筑後の大川や遠くは鹿島、塩田方面にも売却されたのである。ところがこの和釘に対して洋釘が製造され販売さ

れるに従って、この地区でも漸次に衰亡に傾いていった。こうして明治五年頃より住民は次第に他の町村へ移転し一軒も鍛冶職はいなくなりその後継者は跡を絶ってしまった。この和釘最後の職人は、故北村弥七で現在生きておれば百十七歳位という。

当時この鍛冶屋の畑地に、牛蒡ごぼうを広く栽培した。この地区で生産した牛蒡は他に比べて甘味があり柔らかくて大好評であった。これは鍛冶屋さんが捨てた鉄くずや石炭がらが土壌の成分を良くし牛蒡によい地味となったものと思われる。その当時「鍛冶屋のごぼう」といって評判がよく高く商品化され値段もよかつたとの記録がある。今日でも古老の井原保美は「あの鍛冶屋ごぼうの味は舌に残って忘れられない」としきりに賞讃する。

牛蒡の外にこの地区では、桑を栽培し桑の葉の産地でもあった。この地域一帯は昔、東与賀町内でも一段と高い台地になっていて「島の内」とも呼ばれていたという。このことは郷村帳―与賀下郷の中の「実久村」の中に、鍛冶屋・上町と「島の内」の名が出ている。この小高い島全体に桑の木が繁茂し、養蚕時にはその葉っぱが売却されて、相当の金額に上つたらしい。ところが本県の絹織物業が衰亡しこの養蚕がすたれた年代から鍛冶屋の桑畑も伐採され切り取られてしまった。同時に高値であった桑畑もその土壌や泥土は削りとられて、現在の佐賀市佐嘉神社前の南側駐車場の埋め立てに使われたり、近くは東与賀町内や近隣の家建築の際等の壁泥に売却されたりしたのである。

鍛 冶 屋

この村落の北部に鍛冶屋天神を祀る氏神さんと、近くに稲荷大明神があり、その御堂の後方には巨大な棕の大樹が亭々とそびえ立っている。樹齢も三百年近くはあると思われ、佐賀県の名木・古木の指定を受けた住吉神社

の藤の木や下飯盛八幡の大楠にも匹敵するようである。

鍛冶屋の天満宮は、昔は現在の馬場平吾住宅の東部にあったらしく、明治四十年の「宮寄せ」——の法律によって、佐賀市本庄町鹿の子天満宮へ寄せ宮を余儀なくさせられ、当時の鳥居及び山犬等も移転してしまった。鹿の子天満宮を見ると、現在二重の大鳥居があるがその一対は、この鍛冶屋より移転寄進のものである。このことは東与賀の古地図でも証明されるところである。したがって鍛冶屋の天満宮には、鳥居や社殿もなく、小高い地所に二坪の御堂があり、菅公（菅原道真）の木像を祀つてある。製作者も年代も不明。

この御堂の側に、稻荷大明神の石碑がある。これは安政二年（一八五五）の建立である。それと並んで南無阿彌陀仏碑があるが、宝暦四年（一七五四）のものである。その他万霊塔安永七年（一七七八）明治十一年再建施主は、当村辻小路九人——とある。こうした混祀や寄せ神の例は他にも見られない珍しいものである。

この鍛冶屋天神の祇園は、船津八幡宮の祇園と共に往時は非常に盛大であった。毎年八月一日には天神前の広場には、とうばた（紙凧）をはじめ、おもちゃ等の出店が並び、境内の北側の畑には踊り舞台もできて、夜は遅くまでにぎわつたものである。しかし、この祇園祭りも時代の推移とともに消え失せて、最後は大正五年で終止符を打つたのである。最後を飾るために各家々では紙で作つた角燈籠の提灯を軒先に立て、ほのかなる献燈に誘われて老若男女の群れが浴衣がけで団扇片手に集い興じた姿は、尚今日でも旧き時代の名残として想い出されるのである。

この村落の北西端に、昔の古刹潮音寺の跡がある。「九州治乱記」によると天文二年（一五三三）に龍造寺隆信が、若宮八幡宮（上町）の神宣によって、飯盛城（本庄町上飯盛）の高木鑑房を攻略した時の陣所跡である。佐

賀県史には次のような記録がある。

佐嘉郡実久村 海雲山 潮音寺

一、當寺儀は元來慶閨寺末寺に有之候処年来及大破候得共余多く末寺にて本寺よりも修復等不及に候に付從高傳寺修復等相加置候間高傳寺末寺に被仰付度く高傳寺へ從慶閨寺相願候処被達御年に天明七年末七月願之通被仰付候事

なお、この潮音寺に所属する田屋敷は三反九畝二四歩、地米も二石七斗三升四合と記録されてるので、全盛の頃は相当に大きい寺院であつたことが想像され、現在も「万部経」が秘蔵されている。こうして昔を誇つた潮音寺も、戦後の農地解放によつて、免田もすべては小作人に渡り、現在では一宇の御堂と数十基の墓地のみが淋しく残されている。実に人の世は諸行無常、色移り香も失せて滔々と鳴りし潮の音も、既に跡絶えて聞こうにも聞けない今日この頃である。



潮音寺

津

四 船 津

船

船津は東与賀町で一番東北部に位置し、東は八田江を隔てて川副町西船津に相對し、北は立野に西は上町、南